

「逆選択」と銀行

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/46890 |

コラム 「逆選択」と銀行

ここでは、経済学におけるユニークな概念である「逆選択」(adverse selection)



に照らして、銀行が融資前に必ず行う「審査」(screening)の重要性について考えてみましょう。銀行にとって審査は本当に骨の折れる作業です。一般に、借手は融資案件のリスクをよく知っていますが、貸手はそれを知りません(こうした情報格差を経済学では「情報の非対称性」と呼んでいます)。したがって、銀行は企業が融資を申し込んできた場合、その企業について、経営内容を踏まえた上で、資産・財務状況、新規投資プロジェクトの採算性について詳しく調べなければなりません。財務諸表、資金繰り表、税務申告書、設備投資計画書などを分析したり、工場見学、店舗視察など現地調査を行ったりするには、専門知識・ノウハウに加えて多大な労力を要します。社長の経営者としての「器」(資質)を見極めたり、従業員の働きぶりを評価したりすることも欠かせません。その企業が属している業界の動向を探ることも大切です。こうした審査を経て、銀行は融資の可否を決め、融資するとなったら、貸出金利を設定します。金利にはもちろん、審査結果に沿ったリスク・プレミアムが反映されます。

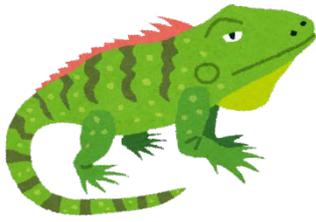
以上のように、審査は膨大で煩雑な作業です。しかし、だからといって、銀行が審査を廃止し、えいやっ!と、どのような企業に対しても同一の金利、例えば5%で融資することにしたら、どのような事態を招くでしょうか?貸出金利には過去の貸倒実績率がちゃんと反映されており、その銀行は計算上、必ず採算が取れると確信しています。

結果はその銀行の自信を裏切るものとなります。すなわち、貸出金利をいくら厳密に計算したとしても、その銀行を待つのは経営破綻だけです。というのも、他行から5%未満で借りられる優良企業はその銀行をまったく相手に

しない一方で、5%だったら大助かりと考える倒産寸前の企業がこぞって融資を申し込んでくるため、その銀行は結局、多額の不良債権を抱えるハメに陥るからです。



さて、生物学では『種の起源』(1859年)で知られるチャールズ・ダーウィン(Charles Robert Darwin; 1809~82)が「自然選択」(natural selection)という概念を提唱しました。それは、ある生物集団の生存競争において、環境に適した遺伝形質を持つ個体が生き残り、それが何度も繰り返されて種が成立するというものです。このように自然選択の過程では「優秀な」個体が生き残っていきます。他方、上で述べた銀行の場合には、審査を軽視したがゆえに「劣悪な」企業だけが顧客として残りました。こうした現象を経済学では「逆選択」と呼んでいます。「逆選択」は銀行にとって審査がいかに重要な業務であるかを如実に物語っています。



なお、世界で最初に「逆選択」の仕組みを説明したのはアメリカの経済学者、ジョージ・アカロフ(George Arthur Akerlof; 1940~)です。1970年のことでした。後年、彼の業績は「情報の経済学」(「情報の非対称性」にかかわる経済分析)の発展に伴って、その基礎を成すものであると高く評価されました。そして2001年、彼はついに他の2名の経済学者とともにノーベル経済学賞を受賞するに至りました。

ジョージ・アカロフ



出所: <http://www.nobelpreis.org/japanese/wirtschaft/akerlof.htm>

(文責: 広報担当 加藤 峰弘)